

氏 名	村 山 幸 子
学位(専攻分野)	博士 (心理学)
学 位 記 番 号	博教心甲 第5号
学位授与の日付	2022年 3 月26日
学位授与の要件	学位規則 (昭和28年 4 月 1 日文部省令第 9 号) 第 4 条第 1 項該当
学 位 論 文 題 目	都市部在住高齢者における世代継承性の特徴： 改訂版 世代継承性尺度の作成による基礎的検討と 世代間交流を通じた世代継承性の変容プロセスの検討 Characteristics of Generativity among an Urban Community-dwelling Elderly: A Basic Study through the Development of Revised Japanese Version of Generativity Scale (JGS-R) and A Qualitative Study of the Transition Process of Generativity through Intergenerational Programs
論文審査委員	主 査 教 授 北 村 文 昭 副 査 教 授 坂 上 裕 子 副 査 准教授 森 脇 愛 子 副 査 国立長寿医療研究センター老化疫学研究部副部長 西 田 裕紀子

論 文 の 内 容 の 要 旨

村 山 幸 子

本論文の背景と目的

少子高齢化や核家族化を背景に、地域のつながりの希薄化と住民の社会的孤立が全国的な課題となりつつある。こうした課題を解決するアプローチの一つとして、血縁や世代の垣根にとらわれず、高齢者が自身の知恵や英知、経験や技術などを若年世代と分かち合い、それぞれの成長と健全な地域づくりを目指す「世代間交流」が関心を集め、活動が活発化している。“generativity” (以下、世代継承性) は、それらの活

動に参加する高齢者の意欲や社会参加の効果を検証する上での鍵概念として注目されている。

世代継承性は、E. H. Erikson の漸成的発達図式において、第7段階の中年期に提示された心理社会的課題である。Erikson は当初、「次世代を確立させて導くことへの関心」(Erikson, 1950 草野訳 1956) という世代継承性の第一義的定義を示し、人は中年期になると、子育てや職場での部下の指導・教育などを通じて若年世代への関心が高まることを指摘した。そして、後に「自分自身の更なる同一性の開発にかかわる一種の自己生殖も含めて新しい存在や新しい制作物や新しい観念を生み出すこと(行為・行動)」(Erikson & Erikson, 1997 村瀬・近藤訳 2001) として定義を拡大し、自己探求や創造性といった新しい要素を世代継承性の概念に加えている。

ただし、長寿化や晩婚化などによるライフサイクルの構造変化に伴い、近年は世代継承性を中年期に限らず、成人期以降全般を通じた心理社会的な課題として捉える考え方が主流となっている (e.g. Cheng, 2009)。なかでも、McAdams & de St. Aubin (1992) は Erikson による定義を再検討し、世代継承性への関心と行動の個人差を測る尺度を開発したことで、欧米圏における実証研究を大きく促進した。McAdams らは、「次世代の世話と責任」、「コミュニティや隣人への貢献」、「次世代のための知識や技能の伝達」、「永く記憶に残る貢献・遺産」、「創造性」という5つの要素が世代継承性の概念を構成することを示している (田渕・三浦・中川・権藤, 2013)。

一方、日本では、1994年の「21世紀福祉ビジョン」(高齢社会福祉ビジョン懇談会, 1994) 等で世代間交流の重要性が強調されて以降、多くの自治体やNPO等により世代継承性の醸成を目的とした実践活動が推進されてきた。子育てサロンでの絵本読み聞かせや、地域の子どもたちへのあいさつ・声かけ運動などはその一例であり、多様な分野で若い世代への支援や地域貢献に関わる高齢者が増えつつある。健康寿命の延伸により、世代間交流は今後さらに需要が高まると推測されるが、その一方でエビデンスに基づくプログラム設計や効果評価の取り組みは十分になされていない。

本論文では、高齢化社会における新たな試みとして世代間交流を導入および促進する上で、以下の通り3つの研究上の課題が存在すると考え、それぞれの課題に応じた調査研究を行った；①一般高齢者を対象とした世代継承性の測定指標が確立されていないこと (第Ⅱ部)、②高齢期の世代継承性について実証研究に基づくエビデンスが不足していること (第Ⅲ部)、③高齢者が世代間交流プログラムに参加し、世代継承性を発揮するに至るメカニズムとその効果が明らかになっていないこと (第Ⅳ部)。

第Ⅱ部と第Ⅲ部では、量的調査を通じて高齢期の世代継承性の測定尺度を作成し、当該時期における世代継承性の性差と関連要因を探索的に検討した。続く第Ⅳ部では、実際に世代間交流プログラムに参加する高齢者への質的調査から、世代継承性への関心と行動が顕在化するプロセスとその意味づけをボトムアップに検証した。

なお、本論文を構成する研究はいずれも「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」に準拠し、東京都健康長寿医療センター研究部門倫理委員会の審査・承認を得て実施した。

本論文の概要

本論文は、5部から構成されている。

第Ⅰ部では、本研究の問題、方法論、ならびに研究デザインの全体像を示した。

第Ⅱ部 改訂版世代継承性尺度（JGS-R）の作成と信頼性・妥当性の検討

第Ⅱ部では、日本語版 Generativity 尺度（大場他，2013）を一部改変することで、世代継承性に関わる意識と行動を多元的かつ簡便に測定できる一般高齢者用の尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検証した。

本研究の調査協力者は、東京都A区および神奈川県川崎市B区在住の65—84歳の男女6,777名であった。調査を行った2016年現在、A区の人口は約34万人、B区の人口は約21万人であり、高齢化率はそれぞれ25%と19%であった。本研究では調査実施年の住民基本台帳をもとに、A区から3,000標本、B区から3,777標本を無作為抽出し、郵送による無記名自記式の質問紙調査を実施した。集計の結果、性別および年齢を特定することができた有効回答者数は全体で3,116名（男性1,351名、女性1,765名、有効回答率46.0%）であった。

調査の実施にあたり、日本語版 Generativity 尺度（大場他，2013）の原著者から許可を得た上で、心理学と福祉学の研究および実践に携わる複数の専門家により尺度の項目内容を精査し、12項目を改訂版世代継承性尺度（Revised Japanese Version of Generativity Scale；以下、JGS-R）として使用した。

（JGS-R の因子パターン・信頼性・因子妥当性の検討）

JGS-R の項目に欠損値が含まれる者を除外し、残りの1,393名（男性610名、女性783名、平均年齢73.0歳、 $SD = 5.6$ ）の回答データを用いて、JGS-R の因子パターンと

信頼性、ならびに因子妥当性の検討を行った。

まず、主因子法（Promax 回転）による探索的因子分析を行い、固有値の落ち込みから「世代継承的行動」、「世代継承的関心」、「世代継承的達成感」という 3 因子（各 4 項目）を抽出した。「世代継承的行動」は「自分の人生について若い人たちに語ることで、彼らを支援する」などの項目から構成されており、自身の経験の教授・伝達や助言といった、若年世代に対する具体的な行動を表している。続く「世代継承的関心」は、「自分の経験を他の人と分かち合いたい」など、若年世代との関わりや創造的な行為に対する関心が項目内容に含まれている。さらに、「世代継承的達成感」は「世の中に恩返しをしているような気がする」など、他者および社会に対する貢献や、後世に継承されるような物事に携わっていることへの実感を表す。下位尺度ごとの Cronbach の α 係数は、「世代継承的行動」で .94, 「世代継承的関心」で .91, 「世代継承的達成感」で .90 であり、いずれも高い内的整合性が認められた。また、全 12 項目での信頼性係数は .93 であった。

次に、JGS-R の因子妥当性を確認するため、探索的因子分析で認められた 3 因子を下位因子、「世代継承性」を上位因子とする 2 次因子構造のモデルについて確認的因子分析を行った。分析の結果、当該モデルの適合度指標は χ^2 (53, $N=1,393$) = 496.87 ($p < .001$), GFI = .944, AGFI = .917, RMSEA = .078 であり、カイ二乗検定ではモデルは棄却されたが、他の適合度指標は良好な値を示していた。

(尺度の基準関連妥当性の検討)

世代継承性の中核に養育や若い世代への関心があることを踏まえると、世代継承性の得点が高いほど、自分より下の世代への関わりやサポートの頻度も高いことが推測される。そこで、本研究では他世代との会話頻度、他世代への手段的サポートおよび情緒的サポートの提供頻度、地域における子育て支援行動との関連から JGS-R の基準関連妥当性を検討した。

JGS-R の項目に加えて、上記の変数に欠損値が含まれる回答者を除外し、残りの 1,044 名（男性 470 名、女性 574 名、平均年齢 72.3 歳、 $SD = 5.5$ ）を対象として分析を行った。尺度の因子間相関が高いことから、他の 2 つの下位尺度得点を制御変数として偏相関係数を算出した。分析の結果、全ての変数間に有意な正の相関関係 ($r = .14 - .33$, いずれも $p < .001$) があったことから、尺度の基準関連妥当性が認められた。

第Ⅲ部 高齢期における世代継承性の性差と関連要因の検討

第Ⅲ部では第Ⅱ部で作成した JGS-R を用いて、世代継承性の性差と関連要因を探索的に検討した。本研究の調査協力者と手続きは、第Ⅱ部と同様であった。

(世代継承性の性差の検討)

JGS-R の項目に欠損値が含まれる者を除外し、残りの1,393名（男性610名、女性783名、平均年齢73.0歳、 $SD=5.6$ ）の回答データを用いて、世代継承性の性差を検討した。性別および年代（前期高齢期・後期高齢期）を独立変数、JGS-R の各下位尺度得点ならびに総得点を従属変数とした二要因分散分析の結果、いずれの場合も性別の主効果が有意であり、女性よりも男性の平均値が高かった（e.g. JGS-R 総得点：男性1.95点、女性1.79点、 $F_{(1,1389)} = 11.07, p < .001, \eta^2 = .008$ ）。

また、下位尺度得点の分布に注目すると、関心（ $M = 2.77$ ）に比べて行動（ $M = 1.23$ ）と達成感（ $M = 1.59$ ）の数値が全体的に低かった（いずれも $Range = 0 - 5$ ）。したがって、本研究の分析対象者は若年世代との関わりや創造的な行為に対して一定の関心は持ちつつも、それを具体的な行動へとつなげることが難しく、達成感も得られにくい状況にあったと推察された。

(世代継承性の関連要因の検討)

JGS-R の得点に性差が認められたため、男女の層別に世代継承性の関連要因を検討することとした。JGS-R の総得点を目的変数、居住年数、子どもの有無、孫の有無、就労の有無、子育て支援団体への参加の有無、主観的健康感、精神的健康、生活機能の自立度を説明変数として、強制投入法による重回帰分析を行なった。これらの測定項目に欠損値が含まれる回答者は分析から除外し、残りの1,187名（男性527名、女性660名、平均年齢72.6歳、 $SD = 5.5$ ）の回答データを用いて分析を実施した。

分析の結果、男女ともに仕事に就いていること（パートやアルバイトを含む）、子育て支援団体に参加していること、精神的健康、ADL の自立度と世代継承性との間に有意な正の関連が認められた（ $\beta = .081-.318$ ）。また、男性の場合のみ、子どもがいることと世代継承性との間に正の関連（ $\beta = .148, p < .001$ ）があることが明らかとなった。

第Ⅳ部 世代間交流プログラム参加者における世代継承性の変容プロセスと意味づけ

第Ⅳ部では、世代間交流において世代継承性への関心と行動が顕在化するプロセスとその意味づけを当事者の内的視点から検討した。5年以内に世代間交流プログラムに参加し始めたこと、および単発的なイベント（お祭りなど）ではなく、体系化されたプログラムに継続参加していることを条件として雪だるま式にサンプリングを行い、都市部在住の高齢期男女15名（男性4名、女性11名、平均年齢71.9歳、 $SD=4.6$ 、66—80歳）から調査協力を得た。調査は2016年12月—2017年3月の期間中に、1対1の半構造化インタビューにて実施した。インタビューでは自身の子どもや孫、および世代間交流プログラムの中で子育て世代や子どもたちの世話に関わったエピソードや、そうした経験の中で感じた自身の心理的変化について聴取した。

分析では、各調査協力者の逐語録について切片化とコーディングを施し、それらを内容の類似点・相違点に基づいてカテゴリーへと抽象化した。さらに、時系列と語りの文脈に沿ってカテゴリー間の関連性を検討した。本研究では、以上の分析を①家庭内での子どもおよび孫の世話経験と、②世代間交流プログラムにおける若年世代の世話経験のそれぞれについて実施した。

（家庭内での子どもおよび孫の世話経験）

本研究の調査協力者にはいずれも2人以上の孫（調査時点で5歳—19歳）がいたが、彼らは「日常生活の補助（食事、寝かしつけなど）」や「緊急時の預かり」など、過去に何らかの形で孫の世話に関わった経験を有していた。世話の頻度は、親（祖父母からみた子ども）と孫が近距離に暮らしているほど、また、親が持つ子育てリソース（特に人的リソース）が少ないほど高まることが分かった。さらに、こうした環境的な要因とあわせて、調査協力者の多くが、“親は育児に精一杯で自分たちの面倒を見る余裕は無いだろう”という「若年世代のゆとりの無さ」を認識しており、彼らに負担や迷惑をかけないような生き方を探し求めていた。この「自立した生き方の探求」は、家族の一員として親や孫と一緒に成長したいという願望と共に、「親の育児負担軽減への貢献」および「孫にとっての居場所」になりたい、という関心を惹起するものであった。

ただし、この場合の「貢献」とは、必ずしも祖父母である調査協力者が孫の養育に積極的にコミットすることを意味するわけではない。今回の調査では、協力者の大半が「孫や親の主体性に対する信頼」や「孫や親自身の選択の自由」に言及しており、

祖父母はあくまで親の「バックアップ的な役割」に徹するような関与の仕方が望ましいと認識していることが分かった。この背景には、自身が子育てをした当時とは社会環境が大きく変化しているという感覚や、昔の育児スタイルを親に押し付けてはいけないという考えに加えて、自身の「体力・気力の限界」に対する実感が共通するカテゴリーとして抽出されている。また、親や孫の主体性を尊重するという信念は、転じて親－祖父母間の葛藤を回避するような関わり方にもつながり、場面によっては意識的に孫の世話に干渉しないという選択をしている者がいることも明らかとなった。上記の関わりを通じて、調査協力者は親や孫の「見本」として彼らの成長に寄与している実感を得ると共に、「孫以外の子どもたちへの興味・関心の高まり」を経験していることが分かった。

（世代間交流プログラムにおける若年世代の世話経験）

本研究の調査協力者は、絵本の読み聞かせボランティアや、地域の子育てサロン・子育てカフェ等でのボランティア経験を有していた。こうした活動に携わるようになった直接的な背景には、「友人からの誘い」あるいは「地域団体からの要請」があった。また、調査協力者自身にも「退職後の生きがい」を求める気持ちや、「生涯学習」や「社会参加」をしたいという願望があり、それらが組み合わさって孫以外の子どもたちへの世話を促していた。

家庭の場合とは異なり、次世代に対する関心として共通しているのは、“子どもは可愛い”，“子どもからはエネルギーがもらえる”といった、子どもという存在そのものへのポジティブな印象や、子育てしやすいコミュニティを構築するという目的意識である。さらに、彼らは子どもたちとの関わりを具体的に実現する過程で「若い母親の頼もしさ」を感じ、自身が子育て世代だった頃には一般的ではなかった「父親の育児参加への肯定感」を抱くと共に、子ども自身の「主体性の強さ」を実感することで、子どもや、その親自身の選択を支えるような関与の仕方を希求していた。また、多くの調査協力者は上記のような“頼もしい”若年世代と自身を比較する中で、体力の衰えと、自らの有限性に対する認識を深め、そのことが次世代のために何かを創り残すという新規事業への着手を躊躇させている側面もあることが分かった。以上の関わりを経て、彼らはボランティアとしての「技術取得・スキル向上」を果たすと共に、「やりがい・役割意識の獲得」、「興味・関心の拡がり」、「月齢単位での子どもの成長の喜び」を経験していることが明らかとなった。

第Ⅴ部 総合考察

以上の調査結果をもとに、第Ⅴ部では総合的な考察を行った。本論文で作成したJGS-Rは、一般の地域在住高齢者をサンプルとしている点に強みがあり、量・質ともに回答者にとって負担の少ない内容となっている。その項目には、次世代の世話という世代継承性の第一義的定義のみならず、コミュニティへの貢献や創造性に関わる要素が幅広く網羅されている。今後、当該尺度の活用によって、世代継承性の実証研究や理論的・科学的根拠に基づく世代間交流プログラム開発および評価が可能となるだろう。

本論文の定量的調査からは、世代継承性と精神的健康状態およびADLの自立度との関連が示された。また、JGS-Rの下位尺度得点の分布に注目すると、男女ともに「世代継承的関心」に比べて、「世代継承的行動」と「世代継承的達成感」の数値が全体的に低い傾向があり、本研究の分析対象者は若年世代との関わりや創造的な行為に対して一定の関心は持ちつつも、それを具体的な行動へとつなげることが難しく、達成感も得られにくい状況にあったと推察された。これらの結果について、第Ⅴ部ではPutnam（2000、柴内訳 2006）の提唱したソーシャルキャピタルとの関連から考察するとともに、JGS-R得点に性差が見られた要因をEriksonの性役割観との関連から考察した。

高齢期における世代継承性を単純に中年期からの延長として捉えるべきか、あるいは自我統合の中核的な役割を担うものとして、高齢期にかけて質的に変容を遂げると考えるべきか、その性質に関する議論は従来明確な結論に至っていなかった（小澤、2012）。本論文の定性的調査の結果からは、孫の世話と世代間交流プログラムのそれぞれで世代継承性が発揮されるプロセスに明確な違いが見出された。

例えば、Kotre（1984）の「個性性」と「関係性」という基準、およびBradley & Marcia（1998）による世代継承性の分類に照らし合わせると、家庭内における孫の世話は、自分自身に対する関心や行動が高い反面、他者に対する働きかけが少ない「個性性」タイプに相当すると考えられる。一方、世代間交流プログラムでの若年世代との関わりは、自己と他者の双方について世代継承への関心と行動が高い「世代性」タイプに近い様態がみられた。

また、本論文では各場面で焦点となる心理社会的発達課題の違いにも着目した。Eriksonは世代継承性発達のプロセスにおいて、基本的信頼感や同一性、親密性といった、前段階の課題との関連性を重視した。岡本（1997）や深瀬・岡本（2010）によれ

ば、高齢期における同一性形成は、自分の役割意識や、役割に対する積極的関与という点に特徴づけられる。さらに、深瀬・岡本（2010）は、加齢とともに縮小する人間関係の中で新しく他者との関係をつくり、そこに肯定的な意味を付与することで、その関係をあたたく感じ続けることを高齢期の親密性の特徴として指摘した。孫の世話では、若年世代に対する基本的な信頼感や自立といったテーマが個人の中で重要視されていたが、世代間交流プログラムでは、それらに加えて同一性や親密性、そして広義の世代継承性に関連するテーマが幅広く立ち現れていた。本論文のインタビュー対象者の大半が女性であることを鑑みると、同一性、親密性、世代継承性の確立が同時並行的に進むという女性的な心理社会的発達の特徴が結果に反映されている可能性も考えられる。

最後に、本論文の限界として対象者の偏り、および世代間交流プログラムの内容の限定性が挙げられる。今後は晩婚化・非婚化の進行によって、自分の子どもを持たずに生涯を送る人の数も増えてくると推測される。また、長寿化や健康寿命の延伸等に伴い、高齢者の就労や社会参加の可能性はさらに拡大していくであろう。こうした社会的属性および社会参加・社会貢献活動の内容別に、対象者による個別性を浮き彫りにする試みは今後の課題としたい。さらに、本論文では世代継承性の負の側面に十分焦点を当てることができなかった。この点についても、このたびの新型コロナウイルス感染拡大に伴う世代間のつながりの変化も考慮しながら、今後さらなる検討を行う必要がある。

文献

- Bradley, C. L., & Marcia, J. E. (1998) . Generativity-Stagnation: A five-category model. *Journal of Personality*, 66, 39-64.
- Cheng, S. T. (2009) . Generativity in later life: Perceived respect from younger generations as a determinant of goal disengagement and psychological well-being. *Journal of Gerontology: Series B; Psychological Sciences and Social Sciences*, 64, 45-54.
- Erikson, E. H. (1950) . *Childhood and society*. NY: W. W. Norton & Company.
- (エリクソン, E. H. 草野 栄三良 (訳) (1977) . 幼児期と社会 日本教文社)
- Erikson, E. H., & Erikson, J. M. (1997) . *The life cycle completed. Expanded ed.* NY: W. W. Norton & Company.

- (エリクソン, E. H.・エリクソン, J. M. 村瀬 孝雄・近藤 邦夫 (訳) (2001). ライフサイクル その完結 増補版 みすず書房)
- 深瀬 裕子・岡本 祐子 (2010). 老年期における心理社会的課題の特質——Erikson による精神分析的個体発達分化の図式 第Ⅷ段階の再検討—— 発達心理学研究, 21, 266-277.
- Kotre, J. (1984). *Outliving the self: Generativity and the interpretation of lives*. Baltimore: The Johns Hopkins University Press.
- 高齢社会福祉ビジョン懇談会 (1994). 21世紀福祉ビジョン～少子・高齢社会に向けて～ 第一法規出版
- McAdams, D. P., & de St. Aubin, E. (1992). A theory of generativity and its assessment through self-report, behavioral acts, and narrative themes in autobiography, *Journal of Personality and Social Psychology*, 62 (6), 1003-1015.
- 岡本 祐子 (1997). 中年からのアイデンティティ発達の心理学 ナカニシヤ出版
- 大場 宏美・藤原 佳典・村山 陽・野中 久美子・安永 正史・倉岡 正高・竹内 瑠美 (2013). 世代間交流プログラムの評価に向けた日本語版 generativity 尺度作成の試み 日本世代間交流学会誌, 3, 59-65.
- 小澤 義雄 (2012). 老年期の Generativity 研究の課題—その心理社会的適応メカニズムの解明に向けて— 老年社会科学, 34 (1), 46-56.
- Putnam, R. D. (2000). *Bowling alone: The collapse and revival of American community*. NJ: Princeton University Press.
- (柴内康文 (訳) (2006). 孤独なボーリング—コミュニティの崩壊と再生 柏書房)
- 田淵 恵・三浦 麻子・中川 威・権藤 恭之 (2013). 高齢者における世代性 (Generativity) と次世代との関わり行動の因果関係 性差に着目した検討 日本世代間交流学会誌, 3, 35-40.

審 査 の 結 果 の 要 旨

村山幸子氏が提出した学位申請論文「都市部在住高齢者における世代継承性の特徴—改訂版世代継承性尺度の作成による基礎的検討と世代間交流を通じた世代継承性の変容プロセスの検討—」について、2022年1月7日に口述試問を開催し審査した。その結果、審査委員会全員一致で博士号の学位を授与することがふさわしいという結論

に至ったことを以下に報告する。

少子高齢化や核家族化を背景に、地域のつながりの希薄化と住民の社会的孤立が全国的な課題となりつつある。こうした課題を解決するアプローチの一つとして、血縁や世代の垣根にとらわれず、高齢者が自身の知恵や英知、経験や技術などを若年世代と分かち合い、それぞれの成長と健全な地域づくりを目指す世代間交流が関心を集め、活動が活発化している。世代継承性は、それらの活動に参加する高齢者の意欲や社会参加の効果を検証する上での鍵概念として注目されている。

世代継承性は、E. H. Erikson の漸成的発達図式において、第7段階の中年期に提示された心理社会的課題であり、「次世代を確立させて導くことへの関心」(Erikson, 1950 草野訳 1956) および「自分自身の更なる同一性の開発にかかわる一種の自己生殖も含めて新しい存在や新しい制作物や新しい観念を生み出すこと (行為・行動)」(Erikson & Erikson, 1997 村瀬・近藤訳 2001) と定義されている。ただし、長寿化や晩婚化などによるライフサイクルの構造変化に伴い、近年は世代継承性を中年期に限らず、成人期以降全般を通じた心理社会的な課題として捉える考え方が主流となっている。

日本では、1994年の「21世紀福祉ビジョン」等で世代間交流の重要性が強調されて以降、多くの自治体やNPO等により世代継承性の醸成を目的とした実践活動が推進されてきた。子育てサロンでの絵本読み聞かせや、地域の子どもたちへのあいさつ・声かけ運動などはその一例であり、多様な分野で若い世代への支援や地域貢献に関わる高齢者が増えつつある。健康寿命の延伸等により、世代間交流は今後さらに需要が高まると推測される。そこで、本論文においてエビデンスに基づくプログラム設計や効果評価の取り組みを検討した。

本論文の構成

本論文はV部から成る。第I部では、世代継承性および世代間交流について、その概念形成の過程と先行研究の知見を概観した。そして、第II部から第IV部では、高齢期における世代継承性の特徴、とりわけ世代間交流プログラム参加を通じた世代継承性の変容プロセスについてその実態を明らかにするべく、3つの調査研究を行った。

まず、第II部では高齢期の世代継承性を多元的かつ簡便に測定できる改訂版世代継承性尺度（以下、JGS-R）を作成し、その信頼性と妥当性を検討した。日本語版

Generativity 尺度（大場他，2013）をもとに JGS-R の項目を作成し，都市部在住高齢者1,393名に質問紙調査を行った。探索的因子分析の結果，「世代継承的行動」，「世代継承的関心」，「世代継承的達成感」という 3 因子が抽出され，確認的因子分析により因子妥当性が確認された。この 3 因子をもとに作成した下位尺度は，いずれも高い内的整合性が認められた。さらに，JGS-R の各下位尺度得点は他世代との会話頻度，他世代への手段的・情緒的サポートの提供頻度，および地域における子育て支援行動と正の相関関係にあり，このことから尺度の基準関連妥当性が認められた。

続いて，第Ⅲ部では JGS-R を使用し，高齢期における世代継承性の意識および行動の性差・年代差と，その関連要因を探索的に検討した。JGS-R の下位尺度得点を従属変数，性別と年代を独立変数とする二要因分散分析の結果，行動・関心・達成感の全ての側面において性別の主効果のみ有意であり，女性よりも男性の平均値が有意に高かった。さらに，JGS-R の総得点を目的変数として強制投入法による重回帰分析を行なった結果，仕事に就いていること，子育て支援関連団体に参加していること，精神的健康，ADL の自立度と世代継承性との間に正の関連が認められた。

最後に，第Ⅳ部では高齢期の世代継承性の物語的側面に着目し，血縁関係にある子どもの世話経験，および世代間交流プログラムへの参加を通じて地域の若年世代の世話に関わることの意味づけを当事者の内的視点から検証した。地域の世代間交流プログラムに継続参加する首都圏在住の高齢期男女15名を対象に，個別の半構造化インタビューを実施した。ナラティブアプローチに基づく質的分析の結果，世代継承性にかかわる高齢期特有の心理・社会的要素と，要素間の関連性が明らかとなった。自身の子どもおよび孫という最も身近な次世代の世話に関わった経験は，その後，血縁関係にない若年世代への興味・関心を惹起することが実証された。調査協力者は，生涯学習や生きがい創出といった社会参加に対する内的希求と体系化されたプログラムの枠組み，さらには若年世代に対する信頼・肯定感等に後押しされながら自身の技術やスキルを発揮し，若年世代との関わりを続けていた。結果として，彼らはボランティアとしての「技術取得・スキル向上」を果たすと共に，「やりがい・役割意識の獲得」，「興味・関心の拡がり」，「月齢単位での子どもの成長の喜び」を経験していることが明らかとなった。従来，世代継承性は高齢世代から若年世代に向けて積極的に何かを創造し，伝え残すという側面が強調されてきた概念である。しかし，本研究の結果では，子どもや親本人の主体性や選択の自由を尊重し，それらを支えるという形での世代継承のあり方が特徴的であり，自身の死が意識されるからこそ，新規の創造的行動に着

手できない、もしくは敢えて着手しないという選択肢があることも示された。

以上の調査結果をもとに、第Ⅴ部では総合的な考察を行った。本論文で作成した JGS-R は、一般の地域在住高齢者をサンプルとしている点に強みがあり、量・質ともに回答者にとって負担の少ない内容となっている。その項目には、次世代の世話という世代継承性の第一義的定義のみならず、コミュニティへの貢献や創造性に関わる要素が幅広く網羅されている。今後、当該尺度の活用によって、世代継承性の実証研究や理論的・科学的根拠に基づく世代間交流プログラム開発および評価が可能となるだろう。

本論文の意義

本論文の定量的調査からは、世代継承性と精神的健康状態および ADL の自立度との関連が示された。また、JGS-R の下位尺度得点の分布に注目すると、男女ともに「世代継承的関心」に比べて、「世代継承的行動」と「世代継承的達成感」の数値が全体的に低い傾向があり、本研究の分析対象者は若年世代との関わりや創造的な行為に対して一定の関心は持ちつつも、それを具体的な行動へとつなげることが難しく、達成感も得られにくい状況にあったと推察された。これらの結果について、第Ⅴ部において Putnam (2000, 柴内訳 2006) の提唱したソーシャルキャピタルとの関連から考察するとともに、JGS-R 得点に性差が見られた要因を Erikson の性役割観との関連から考察した。

高齢期における世代継承性を単純に中年期からの延長として捉えるべきか、あるいは自我統合の中核的な役割を担うものとして、高齢期にかけて質的に変容を遂げると考えるべきか、その性質に関する議論は従来明確な結論に至っていなかった(小澤, 2012)。本論文の定性的調査の結果からは、孫の世話と世代間交流プログラムにおける世代継承性の特徴には明確な違いが見出された。

例えば、Kotre (1984) の「個性性」と「関係性」という基準、および Bradley & Marcia (1998) による世代継承性の分類に照らし合わせると、家庭内における孫の世話は、自分自身に対する関心や行動が高い反面、他者に対する働きかけが少ない「個性性」タイプに相当すると考えられる。一方、世代間交流プログラムでの若年世代との関わりは、自己と他者の双方について世代継承への関心と行動が高い「世代性」タイプに近い様態がみられた。

また、本論文では各場面で焦点となる心理社会的発達課題の違いにも着目した。

Erikson は世代継承性発達のプロセスにおいて、基本的信頼感や同一性、親密性といった、前段階の課題との関連性を重視した。岡本（1997）や深瀬・岡本（2010a）によれば、高齢期における同一性形成は、自分の役割意識や、役割に対する積極的関与という点に特徴づけられる。さらに、深瀬・岡本（2010a）は、加齢とともに縮小する人間関係の中で新しく他者との関係をつくり、そこに肯定的な意味を付与することで、その関係をあたたく感じ続けることを高齢期の親密性の特徴として指摘した。孫の世話では、若年世代に対する基本的な信頼感や自立といったテーマが個人の中で重要視されていたが、世代間交流プログラムでは、それらに加えて同一性や親密性、そして広義の世代継承性に関連するテーマが幅広く立ち現れていた。本論文のインタビュー対象者の大半が女性であることを鑑みると、同一性、親密性、世代継承性の確立が同時並行的に進むという女性的な心理社会的発達の特徴が結果に反映されている可能性も考えられる。

本論文の限界として対象者の偏り、および世代間交流プログラムの内容の限定性が挙げられる。高齢期における社会参加の可能性は、心身の健康状態に大きく規定されるほか、地域性や他者との関わりを本人が志向する程度によっても左右され得る。また、今後は晩婚化・非婚化の進行によって、自分の子どもを持たずに生涯を送る人の数も増えてくると推測される。長寿化や健康寿命の延伸等に伴い、高齢者の就労や社会参加の可能性はさらに拡大していくであろう。こうした社会的属性および社会参加・社会貢献活動の内容別に、対象者による個別性を浮き彫りにする試みが今後の課題となる。

以上、都市部在住高齢者における世代継承性に関してエビデンスに基づいて定量的、そして定性的な研究として論述した意義を総合的に勘案し、本審査委員一同で博士の学位を授与するに値すると判断した。

以 上